

ワキ 世を捨て人の旅の空 世を捨て人の旅の空 来し方いづくなるらん

これは諸国一見の僧にて候 われこの程は三熊野に参詣申して候 またこれより西国修行脚と志し候

程もなく 帰り紀の路の関越えて 帰り紀の路の関越えて なほ行く末は和泉なる 信太の森をうち過ぎて 松原見えし遠里の ここ住吉や難波潟 芦屋の里に着きにけり 芦屋の里に着きにけり 急ぎ候ふほどに これははや芦屋の里に着きて候 日の暮れて候ふほどに この所に宿を借り泊まらばやと思ひ候

△問答▽

シテ 悲しきかなや身は籠鳥 心を知れば盲亀の浮木 ただ雲水に埋もれ木の さらに埋もれも果てずして 亡心何に残るらん 浮き沈む 涙の波の空舟

地謡 こがれて堪へぬ 古を

シテ 忍び果つべき 隙ぞなき

ワキ 不思議やな幽かに浮かみ寄るものを見れば 舟の形はありながら 乗る人影も定かならず あら不思議の物やな

シテ 不思議の物と承る そなたもいかなる人やらん 本よりこの身は埋もれ木の 人知れぬ身と思し召して 不審はなさせ給ひそとよ

ワキ いやこれはただこの里人の さも不思議なる舟人の 夜々来ると言ひつるに それにすこしも違はねば われも不審を申すなり

シテ この里人は芦の屋の 灘の塩焼く海士人の 類ひを何と疑ひ給ふ

ワキ 塩焼く海人の類ひならば 業をばなさで暇ありげに 夜々来るは不審なり

シテ げにげに暇のある事を 疑ひ給ふも謂れあり 古き歌にも芦の屋の

ワキ 灘の塩焼き暇無み 黄楊の小櫛は挿さで来にけり

シテ 我も憂きには暇なみの

ワキ 汐にさされて

シテ 舟人は

地謡 棹さで来にけり空舟 棹さで来にけり空舟 現か夢か明けてこそ 海松布も 刈らぬ芦の屋に 一夜寝て海士人の 心の闇を弔ひ給へ 有難や旅人は 世を遁れたる御身なり 我は名のみぞ捨小舟

ワキ 法の力を頼むなり 法の力を頼むなり

シテ 何と見申せども人間とは見え給はず候 名をおん名のり候へ

ワキ 今は何をか包むべき これは昔近衛の院の御宇に 頼政が矢先にかかつて身を亡ぜし 鶴といふ化生の物の亡魂にて候 跡を弔ふて給はり候へ

地謡 さては鶴の亡魂にて候ふか 跡をば懇に弔ひ候ふべし 古の事をおん物語り候へ

シテ さても近衛の院のご在位の時 仁平の頃ほひ 主上夜な夜な 御悩あり

地謡 有験の高僧貴僧に仰せて 大法を修せられけれども その験さらになかりけり

地謡 御悩は丑の刻ばかりにてありけるに 東三条の森の方より 黒雲一群立ち来たり 御殿の上に覆へば必ず脅え給ひけり

シテ すなはち公卿詮議あつて

地謡 定めて変化の物なるべし 武士に仰せて警固あるべしとて 源平両家の兵を選ぜられける程に 頼政を選び出だされたり

地謡 頼政その時は 兵庫の頭とぞ申しける 頼みたる郎党には 猪の早ただ一人召し具したり 我が身は二重の狩衣に山鳥の尾にて矧いだりける 尖矢二条 重藤の弓に取り添へて 御殿の大床に伺

候して 御悩の刻限を今や今やと待ち居たり さる程に案の如く 黒雲一群立ち来たり 御殿の上に覆ひたり 頼政きつと見上ぐれば 雲中に怪しき物の姿あり

シテ 矢取つて打ち番ひ

地謡

南無八幡大菩薩と 心中に祈念してよつびきひようど放つ矢に手応へしてはたと中る 得たりやおうど矢叫びして 落つる所を猪の早太つと寄りて続けさまに 九刀ぞ刺いたりける さて火を灯しよく見れば 頭は猿 尾は蛇 足手は虎の如くにて 啼く声鶴に似たりけり 恐ろしなんども 愚かなる形なりけり

げに隠れなき世語りの その一念を翻し 浮かむ力となり給へ

シテ

浮かむべき便り渚の浅緑 三角柏にあらばこそ沈むは浮かむ縁ならめ

地謡

げにや他生の縁ぞとて

シテ

時もこそあれ今宵しも

地謡

亡き世の人に合竹の

シテ

棹取り直し空舟

地謡

乗ると見えしが

シテ

夜の波に

地謡

浮かぬ沈みぬ見えつ隠れ絶え絶えの いくへに聞くは鶴の声 恐ろしや凄まじや あら恐ろしや凄まじや

△中入▽

ワキ

み法の声も松風も み法の声も松風も 皆実相の道広き 法を受けよと夜と共に かのおん経を誦する このおん経を誦する

一仏成道観見法界 草木国土悉皆成仏

シテ

有情非情 皆共成仏道

ワキ

頼むべし

シテ

頼むべしや

地謡

五十二類も我同性の 涅槃に引かれて真如の月の夜汐に浮かみつつこれまで来たれり 有難や

ワキ

不思議やな目前に来る者を見れば 面は猿足手は虎 聞きしに変はらぬ変化の姿 あら恐ろしの事やな

シテ

さても我悪心外道の変化となつて 仏法王法の障りとならんと 王城近く遍満して 東三条の林頭に しばらく飛行し 丑三つばかりの夜な夜なに 御殿の上に 飛び覆へば

地謡

すなはち御悩頻りにて すなはち御悩頻りにて 玉体を悩まして 脅え魂入らせ給ふ事も我が為す業よと怒りを為ししに 思ひも寄らざりし頼政が矢先に中れば変身失せて 落々磊々と地に倒れて 忽ちに滅せし事 思へば頼政が矢先よりは 君の天罰を当たりけるよと今こそ思ひ知られたれ その後 主上御感あつて 獅子王といふ御剣を 頼政に下されけるを宇治の 大臣賜りて 階を下り給ふに折節郭公音づれば 大臣取り敢へず

シテ

ほととぎす 名をも雲居に あぐるかなと 仰せられければ

地謡

頼政 右の膝をついて 左の袖を広げ月を少し目にかけて 弓張月の 入るに任せてと 仕り御劍を賜り 御前を罷り帰れば 頼政は名を揚げて 我は名を流す空舟に 押し入れられて淀川の 淀みつ流れつ行く末の 鵜殿も同じ芦の屋の 浦曲の浮洲に流れかかつて 朽ちながら空舟の 月日も見えず暗きより暗き道にぞ入りにける 遙かに照らせ山の端の 遙かに照らせ山の端の月と共に 海月も入りにけり 海月と共に入りにけり

(上演に際し、演者により詞章の変更がある場合があります)